デューイ実験学校における レシテーション（recitation）の特色
―デューイのレシテーション観と比較して―

森　　久　佳
（教育学科）

本稿は，デューイ（J. Dewey）及び『デューイ・スクール』（*The Dewey School*, 1936）におけるレシテーション（recitation）観との比較を通して，『実験学校活動報告』（*Laboratory School Work Reports*）に見られるレシテーションの特色を検討した。その結果，『実験学校活動報告』では，レシテーションは一部の限定された成長段階（主として年長児童グループ）での学習活動を示していた一方で，デューイ及び『デューイ・スクール』は，年齢を限定しない学習活動一般を指す概念として捉えていたことが確認された。

キーワード：デューイ，『デューイ・スクール』，デューイ実験学校，レシテーション（recitation）

はじめに

デューイ実験学校（Dewey's Laboratory School）が開校した19世紀後半（1890年代），米国都市部の学校教育に対して，都市化・産業化に伴うカリキュラムの過剰と授業形態の機械化・形式化が問題視されていた。そうしたなか，実験学校では，小型の共同体（miniature community）ないし胎芽的な社会（embryotic society）としての学校を実現するために「オキュペーション（occupation）」の活動が導入され，それをカリキュラムの基本活動として位置づけることで，教材の再構成が求められていた[1)]。このような実験的な活動は，当時の他の実験諸学校と比べても，デューイ実験学校以外には例を見ることができなかったと言われている[2)]。

こうしたデューイ実験学校を対象とする研究は，今日においてもさまざまな観点から進められている[3)]。そのなかで，「レシテーション（recitation）」の観点による実験学校の分析は，これまで十分になされてきたとは言えない。「レシテーション」の概念の重要性は，当時，デューイ（J. Dewey）がその概念のとらえ直しを図ったことからも窺い知ることができる。彼は，『学校と社会』（*The School and Society*, 1900）において，従来のレシテーションの概念が，すでに獲得した知識を検査する場とみなされている点を批判し，それを子どもたちがコミュニケーションの本能（communicative instinct）を自由に活動させる場，すなわち，「社会的会合の場（social meeting place）」として捉え直すことを主張した[4)]。

デューイのレシテーション論に関する先行研究として，堀江・羽野の一連の研究がある[5)]。堀江らは，デューイのレシテーション論を彼の授業論や教師論を考える手がかりとして検討しており，実験学校のレシテーションを考察する際に有益な示唆を与えてくれる。実際に，堀江らの研究においては，レシテーションの観点から実験学校の実践も分析されている。ただし，その実践はデューイの『学校と社会』に示された事例（デューイが例として挙げたもの）を対象としており，具体的な一次資料を基に，実験学校の取り組みそのものを加味した検討にまでは及んでいない。

また，シカゴ時代におけるデューイの「レシテーション」論の特色に関しては，森がデューイの「学びの観点」から検討し，彼のレシテー

ション観と「探究的態度」との関わりや，子どもの側からとらえた自然のままの観点と科学や高度に専門化された知識という観点の双方を結びつける「調和」の観点をデューイが教師に求めていた点などを明らかにしている[6]。同じく，シカゴ時代におけるデューイのレシテーション論に着目した中村は，ヘルバルト派の形式段階論に対するシカゴ時代のデューイによる批判的な解釈を検討し，そこで提示されていた知見が『思考の方法』（*How We Think*，1910）の議論の基盤だけでなく，デューイ自身の教授過程論及びカリキュラム論と密接にかかわり合っていた点を明らかにしている[7]。しかし，森と中村の研究は，実験学校におけるレシテーションを分析の対象とはしていない。

そこで本稿は，当時の米国におけるレシテーション観を背景に，デューイ自身が問い直したレシテーション観を，先行諸研究の成果を援用しながら検討する。次に，デューイ実験学校の理論や実践等を著した『デューイ・スクール』（*The Dewey School*，1936）[8]におけるレシテーションの概念を確認する。そのうえで，実験学校におけるレシテーション観を『実験学校活動報告』（*Laboratory School Work Reports*）[9]や『初等学校記録』（*Elementary School Record*）[10]の資料を活用することを通して分析し，その特色を明らかにすること試みる。

1．デューイによるレシテーション(recitation)論の問い直し

(1) 19世紀における「レシテーション」観

キューバン（L. Cuban）が指摘しているように，当時の米国における公立初等学校の教室では，生徒は教科書の文章の一節を復唱（復誦）することや，自分の机で宿題に取り組み，教師とクラスメートの発言に耳を傾ける存在とみなされていた。一方教師は，課題を与え，行動と教室学習の両方で生徒が画一的であることが期待される存在だった[11]。すなわち，「復唱（復誦）」としてのレシーテションが，当時の米国における公立初等学校における支配的な教授方法だった[12]。

また，キューバンは，ハイ・スクールまでの学校教育段階で共通する授業実践の特徴を次のように指摘している。それによると，まず，教師は威圧的な言語表現で話し，教室の活動は，教師の質問や説明，生徒の復唱（復誦）としてのレシテーション，教科書の課題に対するクラスの取り組みを中心に展開していた。教師は行動における画一性（uniformity）を求め，生徒は教卓と黒板に向かって（ボルトで固定された）机に一列になって座り，教師に対して復誦する。そして，教師が許可した場合にのみ，部屋の中を動き回ることや部屋を出たりすることができる。その際，コース・オブ・スタディ，教科書，復唱（復誦），宿題という手段による教室内の学問的な組織化（academic organization）が，クラスの行動全般を左右していたという[13]。

しかし，こうした状況に対する批判と対応が，レシテーションを捉え直す動きの中で生じてきた。藤本（2018）によれば，オスウィーゴ運動を経験した1870年代から80年代にかけて，米国ではヘルバルト派を中心にレシテーションの概念を拡張しようとする理論的動向が生じており，「19世紀後半を通じて，モニトリアル・システムの『復誦』からスタートしたレシテーションは言葉としては一般に『授業』を意味するタームにまで拡張され流布し，あらゆる教授方法を形式として規定し支えるものとなった」[14]という。

(2) デューイによる授業としてのレシテーションの捉え直し

このようなレシテーション観の変化が見受けられるなかで，冒頭で言及したように，デューイもレシテーションの捉え直しを試みていた[15]。この時期の彼のレシテーション論には，「探究の態度」としての「学び」の重視が前提となっていた。彼は，シカゴ時代に著した「レシテーションの方法（The Method of the Recitation）」において，次のように述べている。

学びにおける段階についてまとめることができる前に，私たちは，全体としての学びがどのようなものであるかを知らなければならない。…〔中略〕…学びの態度〔learning attitude〕とは，全体としては，探究の態度である。学びの過程は，何かを見出すことにつながる上で必要な素材と過程を巧みに操ることである。一般的に，授業〔teaching〕に関して問われるべき第一の問いは，その素材〔material〕が子どもの側で探究的態度〔inquiring attitude〕を呼び起こすように提示されているかどうか――子どもをある問題の意識化へと導くように示されているかどうか――である。もし，教師が生徒を探究的な態度へと投げ入れるならば，その教師は良き方法の根源を手にしている。もし，子どもたちが何の質問〔question〕もしなければ，いかに多くのことが学ばれたといても，その授業は貧しいものである。学びは探究的態度であり，最初の段階は困難――問題の意識化〔a consciousness of a problem〕――である。[16)]

その後，デューイは『思考の方法』（*How We Think*, 1910）の第15章及びその改訂版である『思考の方法：改訂版』（*How We Think*, 1933）の第18章において，レシテーションに関して論じている。これらの章のタイトルは「レシテーションと思考の方法（The Recitation and the Training of Thought）」であり，旧版と改訂版の双方の冒頭において，デューイは次のように述べている。

レシテーションにおいては，教師は生徒と最も密接なふれ合いを持つようになる。レシテーションにおいては，子どもたちの諸活動を導き〔guiding〕，情報に対する意欲を喚起し，言語の習慣に影響を与え，観察を方向付ける〔directing〕可能性に焦点が向けられる。…〔中略〕…レシテーションが実施される方法は，自身の生徒の知的状態を診断し，知的反応を呼び起こすような状況を提供する教師の能力〔ability〕をテストする上で，極めて重要なものである。極めて重要なテスト，つまり，教師としてのその技〔art〕をテストするのだ。[17)]

このように，デューイのいうレシテーションは教師と子どもたちが共に学び合う場のことを指し，彼のレシテーション論は，子どもたちの思考を育む教師論としても読むことができる。堀江・羽野は，こうしたデューイの「レシテーション」の捉え直しの特色を，２つの観点にまとめた上で，彼の教師論について言及している。すなわち，デューイが行った転換は，「社会的精神を伴わない『レシテーション』から協同的で社会的な精神に基づくレシテーションへの転換」と，「単なる記憶としての『レシテーション』から思考のためのレシテーションへの転換」であり[18)]，デューイのこうしたレシテーション観の転換は，「ことばの使用を，形式的に再－列挙する（recite）ことから自己と他者を含めた世界とのインタラクションを伴った過去の経験を反省する（reflect）ことへ転換させることだった」[19)]という。その上で，堀江らはデューイの教師論の特色を見出し，彼が芸術活動の精神と表現力を兼ね備えた芸術家として教師を捉えていたこと，また，その教師には，実践的見識に支えられた「連続的ディスコース」の力が求められていたと主張している。

(3)「レシテーション」における「教師からの問い」の重要性

さらに注目すべきことは，デューイが『思考の方法』において，「教師からの問い」と「レシテーション」との不可分な関係について言及している点である。

思考とは，何か新しいことを見出すために，もしくは，すでに既知のものに別の光を当てて知るために，探究し〔inquiry〕，調査し〔investigation〕，考え巡らすこと〔turning over〕，精査すること〔probing〕，掘り下げて考えること〔delving into〕，である。つまり，それは**問うこと**〔questioning〕で

ある。伝統的なレシテーションのうまく定着した特徴は，教師によって質問を尋ねること〔asking of questions by the teacher〕である。しかし，それらは，教師と生徒たちとが協同で議論するために問題を**提起する**ため〔to raise a question〕ではなく，単に解答を得るためになされることがあまりにも多い。予備的な「学習〔study〕」時間，つまり，生徒たちが自分たちのレッスンを暗記する時間と，レシテーションの時間，つまり，自分たちが事前に学習した成果を彼らが披露する時間との間は，たいていの場合分離している。そうした事実は，非常に有害なものである。生徒たちは。自分たちの学習において方向づけ〔direction〕が必要である。それゆえ，いくつかのいわゆる「レシテーション」の時間は，教師あり学習〔supervised study〕の時間であるべきだ。その時間に，教師たちは，生徒たちが出くわす困難を学び，彼らが援用する学びの方法の内容を追求し，ヒントと提案を提供し，ある生徒が自身を阻害するような有害な習慣を身に付けている場合は，そうした習慣を認識させるよう支援する。**あらゆる**場合において，レシテーションは学習の時間の**連続**〔continuation〕であるべきだ。その際，成されてきた内容を見届け，さらなる自立した学習〔independent study〕へと発展させることが行われている。[20]

この引用からもわかるように，デューイは，いわゆる伝統的なレシテーションにおける「教師によって質問を尋ねること」，すなわち「教師による問い＝発問[21]」の行為そのものを否定していない。彼は，この「教師による問い＝発問」の目的を「教師と生徒たちとが協同で議論するために問題を提起すること」へと位置づけ直したといえる。そして，レシテーションを行う技（the art of conducting recitation）のほとんどが生徒たちに問いを発する技（the art of questioning pupils）のことであり，それは，生徒たち自身の探究を方向付けるために，また，生徒たちにおいて自律した探究の習慣〔independent habit of inquiry〕を形作るためにある，と述べている[22]。

以上のことから，デューイによる「レシテーション」観の捉え直しとは，「教師による問い＝発問」の位置づけ直しと言い換えることができる。彼がレシテーションの問い直しを，従来の用語を変更せずに用いたまま行ったのは，そうした（従来の）「レシテーション」において定着していたとされる「教師による問い＝発問」の営み自体を受け継ぐべき重要な要素とみなしていたからだとする解釈も可能だろう。

２．『デューイ・スクール』におけるレシテーション観

（1）学習活動としてのレシテーション

デューイ実験学校を卒業したある卒業生は，同校の教育活動に関してインタビューを受けた際，次のように述べている。

> レシテーションのグループ〔recitation group〕という意味でのクラスに関して言えば，私の記憶はあまり定かではないけれども，あれこれと活動していた。工作室にいることは少なかったけど，それから文学作品に耳を傾け，それを劇にしたりすることも多々あったし，カーン婦人と音楽の授業もしたかな。ピアノを囲んで輪になって座って，一緒に歌って，自分で楽譜を作成したね。何かを勉強したり学んだりするという記憶はないね。読むことを学ぶ過程を経験しているという記憶はないんだけど，読んでいたんだよ。[23]

この引用を言葉通り解釈するならば，学習活動の基本となるクラスとはレシテーションのグループのことであり，レシテーションの中身は，「あれこれと活動していた」ものだということになる。つまり，「レシテーション」は特定の活動に限定されるものでもなく，実験学校で教師と子どもたちが行っていた学習活動全般を指す概念として解釈できる。

ただし，この捉え方は，デューイがシカゴを去ってから20年以上経過した時点（1927年）であることに留意する必要もある。

(2)『デューイ・スクール』(1936年)におけるレシテーション観

『思考の方法』の改訂版が公刊されておよそ3年後，すなわちデューイがシカゴを去ってから30年以上経過した1936年に,『デューイ・スクール』が出版された。かつて実験学校で教師として勤務し，この書物を著したメイヒュー（K.C. Mayhew）とエドワーズ（A. C. Edwards）は（二人は姉妹である），デューイ実験学校にとって，さまざまな活動すべてに取り掛かる前に「思考する習慣（habit of thinking）」を子どもが形成する援助を行うことが，実験学校の日々の実践を通して自己実現の過程を条件づける重要な側面だと述べている[24]。

また彼女らは，日頃の教室での手順（daily classroom procedure）は，グループのメンバーたちによってその日の活動と前の時間の活動との関連を面と向かって議論（face-to-face discussion）することから始まり，新たな問題に直面しそれを分析し，解決に向けた計画とリソースが提案される，とする学習の流れについて説明している。こうした方法によって,「知的能力を備えた感覚（a sense of power to be intelligent）」を個人と集団は手にするとメイヒューらは指摘している[25]。

このような取り組みを，メイヒューらは「レシテーション」と捉えていたと考えられる。彼女らは次のように述べている。

> この学校〔デューイ実験学校のこと〕では，家庭との連続性を特色としていたが，それぞれのレシテーションは，優れて社会的な会合の場〔social meeting place〕であり，そこでは，組織化された自発的な会話がさまざまな流れに沿って進められていた。それは社会的な情報センター〔social clearing-house〕であり，そこでは，経験と考えが交換され，批評の俎上に挙げられたり，また，誤った概念が修正され，新たな思考と探究の流れが出来上がったりしたのである。[26]

この引用は，まぎれもなく，デューイの『学校と社会』の記述が出典となっている 。さらに次の２つの引用も見てみたい。

> 年少のすべてのクラスでは，それぞれのレシテーションの最初の数分間は，教師と一緒になって協議会〔council meeting〕のようなものに費やされていた。そこでは，前の時間の流れ〔threads〕や現在の時間の作業を計画し編成することが取り上げられていた。[28]

> 会話〔conversation〕は，すべての教室において，経験と取り組みを発展させ方向づける手段だった。小規模のグループのおかげで，個人はグループの経験に寄与することができた。それぞれの日のレシテーションは，グループの活動の次なる段階の賛否に関する討論〔debate〕や議論〔discussion〕だった。これらの子どもたちが，その後に続く中等教育及びカレッジ段階の経験において比較的容易に討論できる能力があった。このことは，こうしたタイプのレシテーションの価値を示していた[29]。

こうした教師と一緒に協議会や討論，議論といった活動をレシテーションと呼ぶのならば，少なくとも，30年以上経った状況において，当時の実験学校における学習活動全般はレシテーションとして銘打つ営みとして捉えられていたと解釈できる。

3．デューイ実験学校における「レシテーション」の特徴

(1)『実験学校活動報告』における「レシテーション」

では，当時のデューイ実験学校においては，レシテーションという用語と概念はどのように位置づけられていたのだろうか。

まず，モンロー（W. S. Monroe）は，当時の米国の学校教育現場で用いられていた “recitation” の意味を，“lesson” の意味と関連づけながら，次のように説明している。

「レシテーション〔recitation〕」の用語は，

「テスト練習〔test exercise〕，つまり，テストが主要な要素である練習として援用されていた。この用語の活用は，その元来の意味に限定されていたのである。対照的に，「課業〔lesson〕」は，「指導〔instruction〕やドリル練習，つまり，指導とドリルの両方を結び付ける練習」を指し示すものとして用いられていたのだった。このように，「課業」は，生徒の学びを促進するためにデザインされた「練習」（教師－生徒活動）に言及したものだった。学校実践に関して言えば，…〔中略〕…「多くの学校」では，「レシテーション」は「課業」に大部分が置き換えられていたという[30]。

このような時期にデューイはレシテーションの問い直しを試みたわけであるが，実験学校の教師たちの実践報告をまとめた『実験学校活動報告』では，“lesson”や“work”といった用語が随所に見られるのに比べて，“recitation”という用語が登場する頻度は少ない。

まず，1898年度（1898～1899年）と1899年度（1899～1900年）の『実験学校活動報告』に出てくる“recitation”の用語を確認する（表１・表２）。確認したかぎりでは，“recitation”の用語は，この二年度分の報告の中で３箇所登場している。

この他に，1898年度と1899年度の『実験学校活動報告』では，“recite”という表記が見られる。例えば1899年度版の『実験学校活動報告』では，グループⅧの「フランス語」の報告（1899年12月２日／担当教師：デルピット）には，「このグループは，グループⅦとは急速に差をつけており，非常に満足のいく進展を見せているように思われる。彼・彼女ら〔子どもたち〕はほぼ同じ地点にいたので，週に２回復唱〔recite〕した。彼らはすでに，部屋や人体，衣服の各部の名称を覚えていた。」[31]とある。

この“recitation”の用語は，1900年度版（1900～1901年）の『実験学校活動報告』で頻繁に登場するようになる。まず，1900年10月５日の報告において，以下のような記述がある。

表１　『実験学校活動報告』（1898年度版）における「レシテーション（recitation）」

報告日	グループ	活動	担当教師	『実験学校活動報告』からの引用部分
1898 12/9	Ⅴ	合衆国史	ベーコン	タイプライターで打った自分たちのペーパーを読むことに，２コマのレシテーション〔two recitations〕を費やした。それから，彼・彼女らは，黒板に書くための文章を教師に示す書き方の課業〔writing lesson〕を行った。
1899 4/14	Ⅷ	フランス語	（記載なし）	そのテーマから離れる前に，彼・彼女たちは少なくとも５つの文章で台所の構図について書くことを求められた。これは，彼・彼女らにとっては，特に嫌だったようで，ペーパーをもってこられなかった数名は，この作業から成るレシテーションの時間〔recitation time〕を使う必要があった。

Laboratory School Work Reports, 1898-1899, より森作成

表２　『実験学校活動報告』（1899年度版）における「レシテーション（recitation）」

報告日	グループ	活動	担当教師	『実験学校活動報告』からの引用部分
1900 5/25	Ⅹ	歴史	ベーコン	彼・彼女らは，今年に終えなければならない活動がどのぐらいあるかについて話し合い，レシテーションのための週と時間の数を数え上げ，年度の終わりまでには成果を出せるように活動を分割した。

Laboratory School Work Reports, 1899-1900, より森作成

【グループX】理科 Science／
担当教師：ガリー Garrey（1900年10月５日報告）

動物学的流れに沿う形で扱われる領域は，望んでいたものほど大きくなかった。その理由は，より低次の動物の生活を学習するために必要な顕微鏡を確保できなかったからだ。動物学における計画は，低次の形態から始めて，より複雑な有機体へと活動する〔work〕ことである。その目的は，子どもたちが進化的過程によってより高次の動物へと発展するという関連した概念を手にするためだ。そのレシテーションの活動〔recitation work〕は，子どもたちがすでに身につけている生物学の知識量に関する考えを教師に示すことを主たる目的としていた。質問〔question〕及び小さな提案〔minor suggestion〕によって，子どもたちは，あらゆる植物と動物とを区別するために動物というものを定義することが難しいとわかるよう導かれた。さらに，彼らはじきに，動物とは「肌や骨，筋肉を持つ生き物である」という自分たちの定義が，すべての動物に当てはまるものではないと知った。さらなる質問によって，動物は多細胞ないし単細胞から成るという事実が提起された。…〔略〕…細胞に関する短い議論〔discussion〕が開かれた。〔以下略〕

下線部にあるように，ここではレシテーションという用語が，理科の動物学や生物学をテーマとする一連の学習活動の中で用いられている。この記述から，「子どもたちがすでに身につけている知識に関する考えを教師に示すこと（教師が知ること）」また，「「質問」や「提案」などの働きかけによって，子どもたち対して新たな理解や議論を促す」営みとして，「レシテーション」の内容をある程度一般化して抽出することが可能である。

また，この箇所の他に，1900年版の『実験学校活動報告』で「レシテーション」が登場した箇所すべてをまとめたものが，表３である。

表３ 『実験学校活動報告』（1900年度版）における「レシテーション（recitation）」

報告日	グループ	活動	担当教師	『実験学校活動報告』からの引用部分
1900 11/6	X	算数	オズボーン	１コマのレシテーション時間〔one recitation period〕が，集団，共同，政府，自由の考えの発展に提供された。これらの考えは理解され，それに応じて反応があったように思われる。すでにクラスの態度はより成熟かつ実務的〔business like〕に思われる。
1900 11/28	IX	歴史	ベーコン	彼ら〔子どもたち〕は２コマのレシテーション〔two recitation〕を受けた。ミス･カッシュマンが芸術活動〔art work〕を歴史〔history〕と結びつけることを望んだので，子どもたちが描写したいさまざまな歴史的出来事を自分たちで選ぶのに，30分が費やされた。…〔略〕…金曜日のレッスン〔lesson〕は，ニューヨークの防衛を強化する…ワシントンの移動を取り上げた。
1900 12/7	IX	芸術	カッシュマン	ミス・ベーコンとの話し合いの後，彼女〔ベーコン〕が当クラスに次のことを提案すべきということに決定した。その提案とは，自分たちの歴史のレシテーションルーム〔history recitation rooms〕を彼ら〔子どもたち〕がふさわしい絵で飾るのが望ましい，というものである。
1901 1/11	IX	歴史	ベーコン	２コマのレシテーションの時間〔two recitation period〕が，彼ら〔子どもたち〕に金融制度についてある程度明確な考え…〔略〕…を提供するのに費やされた。彼らはあまりはっきりした考えをもっていなかったので，そのレシテーションは，それらを明瞭にすることから主に構成された。

1900 1/18	Ⅸ	歴史	ベーコン	このクラスは，歴史に関して，週に30分を４回，自宅での30分の学習を２回，行っていた。その学習は，学校における活動〔work〕の準備にとって十分ではなかったので，レシテーション時間〔recitation period〕の１コマは，学習に費やされた。
1901 1/18	Ⅹ	理科	ガリー	その週の後半部分は，『生命の基礎的条件〔The Primary Conditions of Life〕』と『生存のための闘い〔Struggle for Existence〕』に関するレシテーション活動〔recitation work〕に費やされた。
1901 1/25	Ⅹ	歴史	ベーコン	グループⅩは，学校における自分たちの時間の一部を学習時間〔study hours〕として費やした。この時間の間，私〔ベーコン〕は，彼らの学習の諸方法〔methods of study〕において子どもたちを援助することができた。そのレシテーションの時間〔recitation time〕は，合衆国がいかにして領土を手にしたのかについて議論することに費やされた。
1901 2/1	Ⅷ	歴史	アーミテージ	当クラスはメキシコの地図をほとんど完成している。…〔略〕…２つのレシテーション〔two recitation〕が，タバスコへのコルテス〔Cortes〕の航海とその結果としての争いについて読むことに費やされつつある。
1901 2/8	Ⅸ	歴史	ベーコン	彼ら〔子どもたち〕は，合衆国の政治的な地理について，今週２つのレシテーション〔two recitation〕を費やしていた。
1901 2/8	Ⅸ	理科	ジレ	当クラスは，レシテーション時間〔recitation period〕において，ナンセン〔Nansen〕を読むことを進めてきた。その時間の一部は読み方〔reading〕に，また一部は議論〔discussion〕や書き方〔writing〕に費やされた。
1901 2/15	Ⅸ	算数	オズボーン	分数におけるワーク〔work〕が，教科書〔text book〕の問題と一緒に続けられていた。…〔略〕…最後のレシテーション〔the last recitation〕では，三段論法〔syllogism〕が導入された。

Laboratory School Work Reports, 1900-1901，より森作成（下線部も森による）

表３からわかるように，“recitation”は，比較的年長のグループ（Ⅷ～Ⅹ）の報告において見受けられ，限定して用いられていることも窺える。この点は，表１と表２にも当てはまる。

さらに，この年度の報告で“recitation”を一番多く用いているベーコン(G. Bacon)[32]は，『初等学校記録』に収められている彼女自身の論稿のなかで，次のように述べている。

> この非常に幼い子どもたちに対して，教師は有益な情報を提供する。しかし，生徒たちが読む力を身に付ければすぐに，その生徒たちは必要な諸事実を調べ上げるために書物に向かうよう促される。／一般的に，年長の子どもたちには，調べ上げて，全体を作り上げることに向けてそのクラスが貢献できるよう導くために，さまざまな点が与えられる。これが，レシテーションに存在意義〔raison d'etre〕を与える。確かな情報を手にすることができ，この情報収集によって，準備されるべきレッスンが構成される場合を除いて，その子どもたちが暗礁に乗り上げるようにレッスンが実践される場合もあった。また，教師が調べ上げるべき多くのポイントを提供し，それが翌日以降の議論の基礎となることもあった。クラスにおいては，こうした思考のやりとりや補強，批評のおかげで，諸々の考えは整理され，しっかりと記憶に留めることができる。[33]

このように，当時の一次資料である『実験学校活動報告』や『初等学校記録』を見てみると，レシテーション（recitation）とは，「教師と子どもたちがクラスという共同体を形成する中で，子どもたちがすでに身につけている知識に関する考えを教師に示したり，「質問」や「提案」などの働きかけによって，子どもたち対して新たな理解や議論を促し，また，そうした議論などを通して，思考のやり取りや補強や批評を行い，考えを整理し記憶につなげていく機能を備えた，時間的・空間的に区切られた学習活動のまとまり」として暫定的に定義できる。この点は，子どもの「探究の態度」としての「学び」を重視したうえで，「教師による問い＝発問」の位置づけ直しを図ったデューイのレシテーション観と親和性が高いと解釈できる。

ただし，同時に，実験学校のレシテーションは，比較的年長の子どもを対象とした学習活動に限定されて用いられていた用語ないし概念だったとする見解を導出することも可能である。このことは，裏を返せば，『実験学校活動報告』において，「レシテーション」という用語は，実験学校におけるすべての学習活動に対して用いられていたものではなかった可能性がある，ということになる。一方で，デューイは『学校と社会』において「レシテーション」の捉え直しに言及する際に，特に年齢段階を限定してはいなかった。メイヒューらもデューイと同様，『デューイ・スクール』において，特に年長者に限ってレシテーションという用語を用いていたわけではなかった。こうした点で，デューイ及び『デューイ・スクール』と当時の実験学校における「レシテーション」の捉え方に差異があったことが見出された。

おわりに

以上の検討をまとめると，次の通りとなる。

まず，デューイ実験学校自体においては，一部の限定された成長段階（主として年長児童グループ）での学習活動において，「レシテーション（recitation）」という用語が意識的に用いられていた。その一方で，子どもの「探究的態度」と「問う」姿勢，そして「教師からの問い」を重視したレシテーションの抜本的な捉え直しを，シカゴ時代のデューイは展開していた。

その後，後年（1936年前後）にデューイ実験学校の活動を整理する段階において，レシテーションは，年齢に限定されることのない学習活動一般を指す概念として捉えられていた。すなわち，教師と一緒に協議会や討論，議論といった活動から成る実験学校の学習活動，より詳細に言えば，「教師と子どもたちがクラスという共同体を形成する中で，子どもたちがすでに身につけている知識に関する考えを教師に示し（教師が知る）たり，「質問」や「提案」などの働きかけによって，子どもたち対して新たな理解や議論を促し，また，そうした議論などを通して，思考のやり取りや補強・批評を行い，考えを整理し記憶につなげていく機能を備えた，時間的・空間的に区切られた学習活動のまとまり」が，レシテーションとしてとらえられていたということである。

なお，1900年度の『実験学校活動報告』において，レシテーションの用語がそれまでと比較して登場する度合いが高くなった要因については，検討が及ばなかった[34)]。今後の課題としたい。

【注】

1）森久佳「都市化・産業化に対応するデューイ・スクール（Dewey School）の試み：訪問者の目から見た授業実践の特色」大阪市立大学文学研究科『都市文化研究』4，2005年，参照。

2）佐藤学『米国カリキュラム改造史研究：単元学習の創造』東京大学出版会，1990年，51頁。

3）国内外の主要研究は以下通りである。L. N. Tanner, *Dewey's Laboratory School: Lessons for Today, Teachers College Press, 1997;* A. Durst, *Women Educators in the Progressive Era: The Women Behind Dewey's Laboratory School*. Palgrave Macmillan, 2010; M. Knoll, *Beyond Rhetoric: New Perspectives on John Dewey's Pedagogy*. Peter Lang, 2022; 伊藤敦美『デューイ実験学校におけるカリキュラムと学校運営』考古堂，2010年；小柳正司『デューイ実験学校と教師教育の展開』学術出版，2010年；同『デューイ実験学校における授業

実践とカリキュラム開発』あいり出版，2020年；中野真志『デューイ実験学校における統合的カリキュラム開発の研究』風間書房，2016年；千賀愛『デューイ教育学と特別な教育的配慮のパラダイム：実験学校と子どもの多様な困難・ニーズへの教育実践』風間書房，2009年；高浦勝義『デューイの実験学校カリキュラムの研究』黎明書房，2009年。

4）J. Dewey, *The School and Society*（1899）, In *The Middle Works of John Dewey*: 1899-1924. Edited by Jo Ann Boydston. Vol.1, 1976, Southern Illinois University Press, pp.34-35.

5）堀江伸・羽野ゆつ子「J. Dewey におけるレシテーション論と連続的ディスコース」『滋賀大学教育学部紀要（教育科学）』46，1996年；同「ジョン・デューイにおける反省的思考の理論と教師論：連続的ディスコースの習慣形成と教師の役割をめぐって」『滋賀大学教育学部紀要（教育科学）』47，1997年；同「J. Dewey における連続的ディスコース論と教師論：思考を育てる教師のあり方を求めて」『日本教師教育学会年報』7，1998年。

6）森久佳「シカゴ時代（1894－1904年）におけるデューイの『レシテーション（recitation）』論の特色に関する一考察：デューイによる『学び（learning）のタイプ」のとらえ方に着目して」大阪市立大学大学院文学研究科『人文研究』67，2016年。

7）中村仁志「シカゴ時代のデューイによる形式段階論の批判的解釈」『アメリカ教育研究』33，東信堂。

8）K.C. Mayhew & A. C. Edwards, *The Dewey School: The Laboratory School of the University of Chicago, 1896-1903*, D. Appleton-century company, 1936.

9）これは，実験学校の教師たちが，週に一度開かれた教師会合（teacher's meeting）で報告した実践を，タイプライターでまとめた文書である。

10）この冊子は，デューイ及び実験学校の教師たちが寄稿した論文ないし記録を収録したものであり，1900年２月から12月にかけて，シカゴ大学出版から９分冊で刊行されたものを１冊に合本したものである（J. Dewey & L. L. Runyon, *Elementary School Record* [A series of nine monographs], University of Chicago Press, 1900.）。

11）L. Cuban, *How Teachers Taught: Constancy and Change in American Classrooms, 1890-1990*（*2nd edition*）, Teachers College Press, 1993, p.25

12）藤本和久『マクマリーのタイプ・スタディ論の形成と普及：カリキュラムとその実践思想を読み解く基盤』風間書房，2018年，58頁。

13）Cuban, *Ibid*., pp.27-28.

14）藤本，前掲書，74頁。

15）1894年に35歳だったデューイは，ミシガン大学からシカゴ大学に移ってきた。ミシガン時代から教育に関心を寄せ，シカゴの公立学校問題にとりわけ関心を抱いていた彼は，赴任先のシカゴ大学で，教育学を含む哲学・心理学科の主任教授となり，デューイ実験学校の開校に携わることになった。

16）J. Dewey, *The Method of the Recitation: A Partial Report of a Course of Lectures Given at the University of Chicago by Professor John Dewey*, In *Handbook for the Use of Students in the Theory of Teaching*, Oshkosh Normal School, 1899, p.14.

17）J. Dewey, *How We Think: A Restatement of the Relation of Reflective Thinking to the Educative Process*.（*1933*）In *The Later Works of John Dewey*, Vol. 8, Southern Illinois University Press, 1986, p.326.　なお，旧版（1910年）では，この引用箇所の表現等は若干異なっている。例えば，改訂版において「情報に対する意欲を喚起する（arousing eagerness for information）」という表現は旧版には見られない。また，改訂版の「知的反応（intellectual responses）」と“ability”の用語は，旧版ではそれぞれ，「役にたつ精神的反応（serviceable mental responses）」と“skill”になっている。さらに，この冒頭部分以降の箇所は，旧版と改訂版は大幅に書き換えられており，この両者の内容の変遷を分析することも，デューイのレシテーション論を検討するうえで今後必要になると考えられる。

18）堀江・羽野，前掲論文（1996年），29頁。

19）同上論文，31頁。

20）Dewey, *How We Think*（[1933]1986），pp.330-331. なお，太字の箇所は原文がイタリックであり，引用文中の下線は引用者による（以下同様）。

21）ここでは，「発問」を「授業でなされる教師からの問いかけ」ないし「教師が授業中に問いを発すること，あるいは教師が発する問いそのもの」（日本教育方法学会編『現代教育方法事典』）という意味で用いている。

22）Dewey, *How We Think*（[1933]1986），p.331

23）N. L. Griffiths, *A History of the Organization of the Laboratory School of the University of Chicago*. A dissertation submitted to the Graduate Faculty in candidacy for the Degree of Master of Arts. Department of Education, University of Chicago. Griffiths, 1927, p.82. この論文は，デューイ実験学校と

パーカー学校（Parker School）とを比較・考察した修士論文である。

24）Mayhew & Edwards, *Ibid*., p.423.

25）*Ibid*., pp.423-424.

26）*Ibid*., p.337.

27）Dewey, *The School and Society*, p.34.

28）Mayhew & Edwards, *Ibid*., p.377.

29）*Ibid*., p.339.

30）W. S. Monroe, *Teaching-Learning Theory and Teacher Education, 1890-1950*. Greenwood Press, 1952, pp.122-123.

31）*Laboratory School Work Reports, 1899-1900*.

32）Georgia F. Bacon. 実験学校の歴史科主任教師（1897～1903）で，1900～1901年度まで同校の校長も務めた（キャサリーン・キャンプ・メイヒュー／アンナ・キャンプ・エドワーズ『デューイ・スクール　シカゴ大学実験学校：1896年－1903年』小柳正司監訳，2017年，300頁）。

33）G. F. Bacon, “History,” In *The Elementary School Record: A Series of Nine Monographs*, University of Chicago Press, 1900, p.207. なお，この引用は，メイヒューとエドワーズの『デューイ・スクール』にて再掲されている（Mayhew & Edwards, *Ibid*., p.323）。

34）1898年度版と1899年度版の『実験学校活動報告』に “recitation” の用語があまり登場していない理由を，現時点で実証して論じることはできない。ここでは検証すべき仮説的見解として，次のことを示しておく。それは，デューイが「レシテーション」の転換を唱えた『学校と社会』の初版が出版されたのは1899年であり，同年に「レシテーションの方法」も出されている。このことを鑑みると，デューイが意識的に「レシテーション」の問い直しを図るのに呼応する形で，実験学校でも「レシテーション」という用語が用いられるようになり，その結果，1900年度版（1900～1901年）の『活動報告』において「レシテーション」がみられるようになったのではないか，という仮説である。